



闘うコオロギたち。負けた方は逃げまどい、勝った方は、リリリリ...という雄叫びを上げる



コオロギを熱心に見つめるプロのバイヤー。長年の経験に基づいた鑑識眼は、素人の迫臨を許さない



コオロギを取り引きする男たち。なかには背中に入れ墨を彫ったこわもてのバイヤーもいる



都市部再開発のために、取り壊される前の上海文廟花鳥市場。地方の勇猛なコオロギたちは、都市部の路地にできる市場に集結する

昆虫番付

菅豊

(すがゆたか)

東京大学東洋文化研究所助教授

オロギンターが採取したもの、および知識のない素人の私たちが購入したもの、最後に私たちが直接採集したものの順位になった。
疑って申し訳なかったが、コオロギ賭博師・王さんは本当に強いコオロギを見極めることができている人だったのである。そして、やはり素人(私と

助手)が、容易に判断できるものではなかったのである。後日、コオロギの体重を量ってみると、勝敗と体重とに強い相関関係があることがわかった。つまり、王さんは見ばえと戦いぶりの良い大型のコオロギ、すなわち高い値段がつく体重の重いものを視覚的に選択していたのであった。し

かし、コオロギの体重差は、わずか〇・〇五グラムほどしかない。それを、彼は一瞥で見極めたのである。私は、このとき、コオロギ市にたむろするちよつとかがわしげな男たちが、実は、奥深い経験知を身につけた慧眼のもち主であることを思い知らされたのであった。



写真提供：林 成多

ツツレサセコオロギ (学名:Velarifictorus micado)

中国でコオロギ相撲に使うコオロギは、普通はツツレサセコオロギ「闘蟋」である。これ以外にも、エンマコオロギの仲間「油葫蘆」や、ミツガコオロギの仲間「棺材頭」が生息しているが、闘コオロギには用いられないので、商品価値はない。中国普通話(共通語)では「蟋蟀(シーシュアイ)」とよばれるが、上海の人びとは一般に「財吉(ゼツチュエ)、北京や天津などの北の人びとは「蛸蛸(チュイチュイ)」という方言でよぶ。よび名ばかりではなく、闘わせる方法なども、地方ごとに異なっている。

表 採集状況と闘いの順位、および体重の相関

闘いの順位	採集状況	体重(g)	体重の順位
1	王さんが市場で購入したコオロギ	0.219	1
2	コオロギハンターAが草原で採集したコオロギ	0.145	3
3	調査助手が市場で購入したコオロギ	0.139	4
4	私が市場で購入したコオロギ	0.155	2
5	コオロギハンターBが草原で採集したコオロギ	0.130	5
6	私が草原で採集したコオロギ	0.123	6
7	調査助手が草原で採集したコオロギ	0.116	7

* 順位と体重の相関を調べたところ、昆虫学者Alexanderが指摘するように、コオロギの強さと体重は強い相関があった。(Spearmanの順位相関係数は0.8829、Kendallのタウは0.7807であり、2つの変数が独立である確率はそれぞれ0.0085、0.0151)

コオロギ賭博師の眼力

泊まっていた旅館の一室で、助手と私は月餅の容器物でつくった仮設リングで、コオロギたちを闘わせた。トーナメントで、勝者同士と敗者同士を闘わせ順位を決める。一見、総当たり戦の方がよさそうだが、実はコオロギは、負け癖がつくことが昆虫社会学で明らかになっている。負けたと立ち直るのに時間がかかり、負けた直後には普通ならば歯牙にもかかないような相手に負けてしまうことがある。そのため、慎重に相手を識別しながら、闘いを進めていった。表に示した結果を一覧にだければわかるように、王さんが選んだものが最も強く、次いでコ

一攫千金を夢みて
コオロギ相撲は、中国の秋の風物詩。それは、二匹のオスを、狭い楕円形のリングに入れ、片方が逃げるまで闘わせる格闘技である。体重〇・数グラムの小さな身体にもかかわらず、その闘いぶりは体重一トンの闘牛に勝るとも劣らない。迫力満点である。
一九九八年。優秀なコオロギ戦士を輩出することで有名な山東省の小さな街で、私は王さん

(仮名)と出会った。トウモロコシ畑のと真ん中にあるこの街は、八月も末になるとコオロギ市が立ち、それを売買する人びとでとったがえす。コオロギハンターたちは、一攫千金を夢みて広大な畑のなかへ分け入る。秋口のハンティングだけで、山東省の農民の平均年収を超す稼ぎを得ることもあるという。王さんは、はるばる遠く離れた上海からコオロギを買い求めに来たコオロギのバイヤーであり、かつプロのコオロギ賭博師であった。仕事柄、相当警戒心が強い王さんであるが、

私が外国人であることに幾分気を許し、自分たちの営みについていろいろと教えてくれた。どういふコオロギがよいのか、強いのか、彼はよどみなく話す。語られる内容は至って感覚的で曖昧な表現。私は、戦士としてのコオロギの優劣判断のコツや知識を学ぼうとしたが、一筋縄ではいかない。いや、むしろ話を聞いているうちに、彼の言っていることに根拠があるのか、さらに、彼が本当にコオロギに詳しいのを見分けることができるのかどうか、だんだんと疑わしくなってきた。そこで、ある実験を試みることにした。